

享月

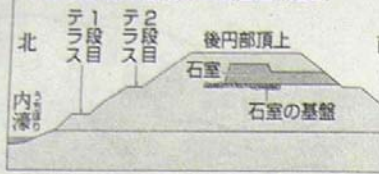
日

楽斤

辰月

2007年(平成19年)3月2日 金曜日

今城塚古墳の後円部の断面図(推定)



復元予想図



「真の継体天皇陵」とされる大阪府高槻市の前方後円墳・今城塚古墳(6世紀前半、全長約190m)で、横穴式石室の基盤とみられる大規模な石組み遺構が見つかった。同市教委が1日、

3段構造 継体陵の証し

高槻・今城塚古墳 大王墓の規模

発表された。石室は失われ、地滑りなどで落ち込んだ状態だが、古墳は完成時に3段、高さは18段前後だったと推定される。これだけの規模は大王(天皇)墓以外に考えられず、同古墳が継体天皇墓であることがより確実になったとしている。天皇陵級の古墳で石室の基礎など、墳丘の内部構造が確認されたのは初めて。見つかった石組みは、

部頂上(高さ約11m)のさらに上に石室があり、築造当時は3段だったとみられる。仁徳天皇陵(堺市)など6世紀以前の大王墓に一般的だった堅穴式石室に比べ、横穴式石室は巨大な天井石を持つなど重量が大きい。今城塚古墳では石棺の破片が3種類見つかったおり、継者らも含め、石室に三つ以上

の石棺が収められると総重量は100tになると推定される。日本書紀には、継体天皇は先代に後継ぎがなく、現在の福井県から迎えられたとある。高槻市教委の森田克行・文化財担当参事は「3段の前方後円墳という大王墓の伝統的な形を継承しつつ、横穴式石室という最新技術も採用している。継体天皇は生前から新しい大王としての強大な権力と

今城塚古墳 01年から調査では、大規模な石室の構造を再現した高さ約170cmの国内最大級の家形埴輪(はにわ)、巫女(みこ)や武人など

をかけた土壇100m以上が出土した。継体天皇陵について宮内庁は、今城塚古墳の南西1.5kmにある大阪府茨木市の太田茶臼山古墳を指定している

が、発掘を許可していない。一方、10世紀の「延喜式」の記述などから研究者らは今城塚古墳こそ真の継体天皇陵だと推定。発掘調査を続けている。

高槻市教委は4日午前10時午後3時、雨天決行、現地に駐車場はなく、JR京都線摂津富田駅から臨時バスを運行する。

横穴式を採用 大王は先進的

いた。横穴式石室があったことは間違いない。先進的な大王だから横穴式石室を採用したのだらう。石室がなかったのは残念だが、早い時期に他

に利用するため、解体されたと考えられる。



大王の石室支えた基盤発見 大阪・高槻の今城塚古墳

Asahi.COM 2007年03月01日21時16分

「真の継体（けいたい）天皇陵」とされる大阪府高槻市の前方後円墳・今城塚古墳（6世紀前半、全長約190メートル）で、横穴式石室の基盤とみられる大規模な石組み遺構が見つかったと、同市教委が1日、発表した。石室は失われていたが、古墳は完成時に3段、高さは18メートル前後だったと推定される。これだけの規模は大王（天皇）墓以外に考えられず、同古墳が継体天皇墓であることがより確実になったとしている。天皇陵級の古墳で石室の基礎など、墳丘の内部構造が確認されたのは初めて。



石室の基盤とみられる石組み＝
1日午後、大阪府高槻市で

見つかった石組みは、地滑りなどで落ち込んだ状態で、後円部北側から出土した。基盤の一部で、1596年の慶長伏見地震の際、崩れたらしい。東西17.7メートル、南北11.2メートルのコの字形に方形の石が3段積まれていた。

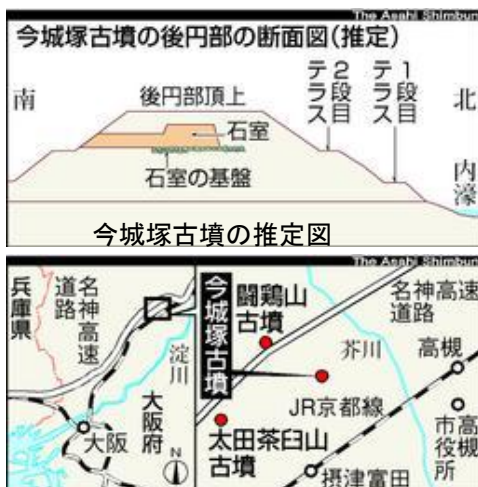
こうした構造、規模から「基盤の上に横穴式石室があったことは確実」と同市教委。古墳の後円部頂上（高さ約11メートル）のさらに上に石室があり、築造当時は3段だったとみられる。

仁徳天皇陵（堺市）など5世紀以前の大王墓に一般的だった竪穴式石室に比べ、横穴式石室は巨大な天井石を持つなど重量が大きい。今城塚古墳では石棺の破片が3種類見つかっており、縁者らも含め、石室に三つ以上の石棺が収められると総重量は100トンになると推定される。

日本書紀には、継体天皇は先代に後継ぎがなく、現在の福井県から迎えられたとある。高槻市教委の森田克行・文化財担当参事は「3段の前方後円墳という大王墓の伝統的な形を継承しつつ、横穴式石室という最新技術も採用している。

継体天皇は生前から新しい大王としての強大な権力と高い技術力をアピールしたかったのでは」と話している。

現地説明会は4日午前10時～午後3時。雨天決行。現地に駐車場はなく、JR京都線摂津富田駅から臨時バスを運行する。



今城塚古墳の地図

〈今城塚古墳〉 01年からの調査では、大王の葬送の儀式を再現した高さ約170センチの国内最大級の冢形埴輪（はにわ）、巫女（みこ）や武人などをかたどった埴輪100点以上が出土した。継体天皇陵について宮内庁は、今城塚古墳の南西1.5キロにある大阪府茨木市の太田茶臼山古墳を指定しているが、研究者らの立ち入りを許可していない。一方、10世紀の「延喜式」の記述などから研究者らは今城塚古墳こそ真の継体天皇陵だと推定。発掘調査を続けている。

史跡 闘鶏山古墳

4世紀前半の前方後円墳

平成18年3月 カメラによる未盗掘の主体部内部の撮影 被葬者の骨とともに鏡など副葬品確認



高槻市立しろあと歴史館 http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi/tugeyama_h18.html

■ 史跡 闘鶏山古墳石槨内画像調査について <平成18年 8月30日 発表>

◆ 経 過



史跡闘鶏山古墳は、未盗掘の主体部(竪穴式石槨)2基をそなえた古墳時代前期前半(4世紀前半)の前方後円墳で、平成14年に国史跡の指定を受け、恒久的保存が図られています。

今回の画像調査は、発見後4年を経て、石槨の構造や遺存状況をできるだけ詳しく確認しようと、奈良文化財研究所に依頼し平成18年3月2日にデジタルカメラによる内部の撮影を行ったものです。この結果、石槨の形状や副葬品等の鮮明な画像が得られました。

◆ 撮影機材

撮影は、2関節をマイクロモーターで駆動し、自在に回転するアームの先端に、リモートスイッチでシャッターが切れるよう改造した800万画素のデジタルカメラと発光ダイオードを組み合わせた補助光源を搭載して行なわれました。

手元で画面を確認しながらシャッターが切れるというスグレモノです。



撮影機

◆画像調査

＜第1主体＞

- 石槨は四国・徳島産の結晶片岩類の板状石材を使用。各石材はおおむね幅20～30cm、長さ40～70cm、厚さ4～6cm の大きさです。

側壁は小口積みで急傾

斜に持ち送って天井部に至る特異な合掌形を呈し、近畿地方ではほとんど例がないものです。両方の小口部は長手積みと小口積みを併用し、ほぼ垂直に積み上げています。

- 当初に確認していた頭骨、方格規矩鏡1点、碧玉製腕飾1点、三角縁神獸鏡2点に加え、紡錘車形石製品、木製柄の短剣、琴柱形石製品、南海産の巻貝片(ゴホウラ?)を各1点、銅鏃3点以上、鉄刀2点をあらたに確認。三角縁神獸鏡1点は京都府山城町椿井大塚山古墳のものと同型鏡であることが確認され、石材落下に伴う損傷も判明しました。
- 石槨の北端部では、胃の一部とおもわれる小札状鉄片多数を確認しました。

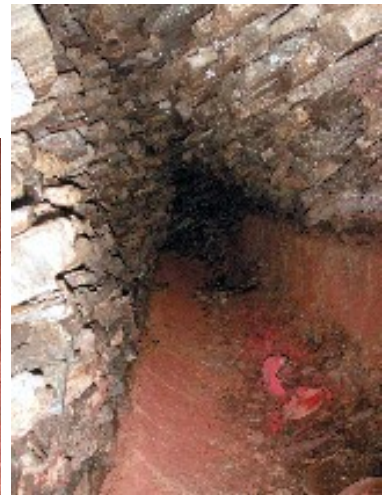
＜第2主体＞

- 石槨の側壁がほぼ垂直に立ち上がる一般的な形態で、長手積みと小口積みを混用。天井石は大振りの平石を8枚ないし9枚使用しています。
- 木棺については、仕切り板とみられる朱彩のある板材が確認されたほか、蓋材および棺身の一部も確認。南側小口板の表面は濡れています。
- 中央部の棺床東上端部と、その北寄りの棺床凹部上面に刀とみられる鉄製品を、さらに南小口板の東側下部に鉄製薄板状物体(鉄刀?)を確認しました。



第1主体の内部

木棺の大半は腐朽していましたが、被葬者の頭骨をはじめさまざまな副葬品が残っています。



北側から見た第1主体の内部

徳島産の板状結晶片岩を積みあげた合掌形。床面は、割竹形木棺を据えるためにU字形で、表面全体に赤色顔料が塗布され、遺骸の付近には朱がまかれています。



石槨。床面に割竹形木棺の蓋や底板などが残り、天井から樹木の根が下がっています。

◆保存環境

- 第1、第2主体とも石槨内は当初より湿度が上昇して全体に水滴を生じ、内側全体を濡らしています。
- 第1主体の棺床上には、側壁などから脱落した石材が多数みられます。
- 第2主体では、南小口板周辺の土壌が発見当初に比べて粒状感が乏しく、泥が洗われて小石等がはっきりとしています。
- 両主体とも、石材の間から樹根が侵入、垂下しています。壁面には白色の菌糸束などが認められました。

◆今後の方向

市教育委員会では、今回の結果などをもとに文化庁や府教育委員会、史跡闘鶏山古墳調査検討委員会の指導を得ながら、古墳のより良い保存や公開の方策などをさらに検討していきます。



闘鶏山古墳 左 前方部 右後円部 闘鶏野神社の裏側より 2007. 3. 10.



闘鶏野神社越しに闘鶏山古墳（名神を渡る橋より）



南平台側より闘鶏山古墳 全景





岡本の町より 継体天皇陵を望む 2007.3.8.

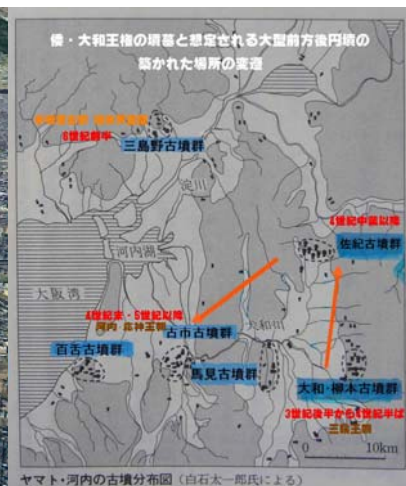
古墳時代の淀川・三島地域の位置付け 三島古墳群の成立-初期ヤマト政権と淀川-より

邪馬台国の地と考えられるようになった纏向遺跡そして そのあとの倭王権(三輪王朝)などヤマト王権の最も重要な通商路・外交路は瀬戸内から朝鮮半島・大陸へと続く西への道である。当時の交通 物資の輸送は舟運が基本であり、瀬戸内海から淀川を遡るルートと大和川を遡るルートがある。

しかし、河内を通過して大和川を遡るルートは途中に二上山の麓 亀の瀬という難所(現在の柏原市)があり、通行ができず、二上山の厳しい竹之内峠越えを余儀なくされる。一方 淀川・木津川から平城山を越えるルートは平坦地であり、木津川の河港「泉津」にも近い。したがって、大和初期王権の時代には 瀬戸内海からヤマトへの主要交通路は大和川よりも、淀川・木津川ルートであったと見られる。そして 瀬戸内から淀川・木津川を遡って 大和へ至る その中間点に三島が位置し、交通路を守る重要な拠点として 直接 大和王権を支えたと考えら、この地に初期古墳群が築かれたゆえんであり、この過程で 世紀後半の前方後円墳



方後円墳 闘鶏山古墳が築かれる。また、三島とちょうど対岸の森古墳群や南山城の三角縁神獣鏡が32面も出土した椿井大塚山古墳



墳の地も同じように淀川・木津川水系の重要拠点であった。そして、大和王権の中心が河内に移ると瀬戸内への門戸は難波津や住吉津など大阪湾沿岸に淀川・木津川流域の重要性は相対的に低下してゆくが、重要な通商路の拠点として三島の役割はその後引き継がれてゆく。実際にその後も 太田茶臼山古墳や今城塚古墳など巨大な前方後円墳が築かれ、さらに終末期の阿武山古墳まで引き続く。

また、この古墳時代の製鉄遺跡(鍛冶工房)を見ると 大和川・淀川水系の大和の主要拠点に鍛冶工房が置かれており、これらの地に製鉄技術を持った渡来人が数多くやってきて、鉄で大和王権を支えていったことがわかる。

このような渡来の新技術は鉄にとどまらず、数多くの工房が畿内に配置されている。



● 鉄の王朝 継体天皇の出身関係図

『古事記』、『日本書紀』によると継体天皇は応神天皇 5 世の孫であり、父は彦主人王。近江国高嶋郷三尾野（現在の滋賀県高島市あたり）で誕生したが、幼い時に父を亡くし、母の故郷である越前国高向（たかむく、現在の福井県坂井市丸岡町高棕）で成長した。

『日本書紀』によれば、506年に武烈天皇が後嗣定めずして崩御したため、大連大伴金村らは越前に赴いて男大

史跡今城塚古墳の第10次調査（現地説明会資料）

調査面積	約300㎡	調査期間	平成18年12月1日から
調査主体	高槻市教育委員会	調査担当者	宮崎誠雄 佐伯めぐみ

1. はじめに

三島古墳群の中央に位置する今城塚古墳は、6世紀前半に築かれた淀川北岸で最大の前方後円墳です。全長190m、南北には造出を伴い、墳丘の周囲を巡る二重の濠と堤を含めた総長は350mをはかります。墳丘は文禄5(1596)年の伏見地震による大規模な地滑りのため、各所で大きく崩壊しています。

高槻市では今城塚古墳の保存整備に向けた規模確認調査を平成9年度から実施し、古墳本来の姿を追究してきました。今回の第10次調査は、後円部の北側墳丘の遺存状態や盛土の状況などを探るためにおこないました。

2. 調査でみつかったもの

調査前の地形は、後円部中央から北にむかって地すべりによる落差約4mの滑落崖が東西方向にそそり立ち、北側には崩壊した盛土が各所でこぶ状の高まりとなっていました。トレンチ(調査区)は、以前におこなった第2次と第8次の調査区とをつなぐかたちで南北方向に設定しました。

◆石室基盤工

後円部北半部、崩落崖裾の北側で、花崗岩類や川原石を用いた「コ」字状の石組を検出しました。全体に滑落部の後(崖)側が大きく沈みこむという、典型的な地震による地滑り(円弧滑り)の状況を示しています。東西の長さは17.7m、南北は東辺で現存長11.2mです。西辺は北端の隅石とその南側の一部の石材が遺存していました。石組の外縁部は、方形や長方形の石材の直辺部(最大長1.15m)をそろえて一直線に並べ、西北の隅部は一辺約50cmの座布団状の石材を用いていましたが、東北隅部は石材が崩れ込んでいました。北辺は中央部が高く、東西の隅にむかって低くなり、西隅では北西側へさらに落ちこんでいます。東辺も中央から折れたように南北が低く、一部は崩壊していました。

外縁の石材は東西辺、南北辺ともに目地を通して最高で3段に積み、高さ(厚さ)は最大で約80cmをはかります。この内側には一辺20~40cmほどの川原石や板石をびっしりと詰めています。

石材の大部分は、花崗岩類とホルンフェルスで、北方約5.5kmの摂津峡(芥川中流域)やその周辺から運ばれてきたと推定されています。他にも緑色片岩や結晶片岩などがわずかに出土しました。

石組外側の土層を観察すると、石積みの進行にあわせてその部度盛土をよせている状況がよくわかり、この石組が露出せず、盛土内に構築されていたことが判明しました。

遺物としては、凝灰岩(二上山白石・阿蘇ピンク石・竜山石)や金銅製品(刀装具・馬具)、鉄製品(鏃・甲冑など)の小片、ガラス小玉などの副葬品類があります。

凝灰岩は小片となって崩落土中に散在していましたが、二上山白石とピンク石には明確な加工痕が認められました。二上山白石では両面に加工痕のある厚さ約 15cm の板状の破片が出土し、石材の厚さから組み合わせ式石棺である可能性が高くなりました。底石とみられる 1 点にはわずかに朱がのこっています。阿蘇ピンク石の一部にも朱が鮮やかに残っていました。金銅製品・鉄製品・ガラス小玉などは、崖際の石組上に堆積した流土中に散在していました。

◆円礫敷

石組遺構の北側に接するように、東西 6.6m、南北 1.5m の範囲からこぶし大の円礫が集中して検出されました。古墳の表面被覆土と同様の均質な黄灰色土上面にこぶし大の円礫がまとまり、二上山白石・ピンク石、竜山石などの凝灰岩や形象埴輪（器台）片、鉄釘などが上面から見つかっています。円礫は淡路島・洲本市付近の海岸で産出することが明らかになっています。

3. 調査でわかったこと

後円部の石室の位置や、構築法を知るうえで重要な手がかりを得ることができました。

石室基盤工は、検出状況や崩落崖との位置関係から判断して、現況の後円部上面の北側付近にあったものが、地すべりによって崩落したと判断できます。後円部上面でおこなった第 8 次調査では、南側へ滑落した礫群がみつかっています。その検出状況や石材の形状・種類などが似ていることから、本来は一体であった石組が南北に分かれて崩落したと考えられます。

石組を盛土内に埋めこみ強固な基盤を構築して、上方に設置される大きな重量物（横穴式石室）を直接支えるとともに、その重量を盛土全体に分散させようとしたと考えられます。

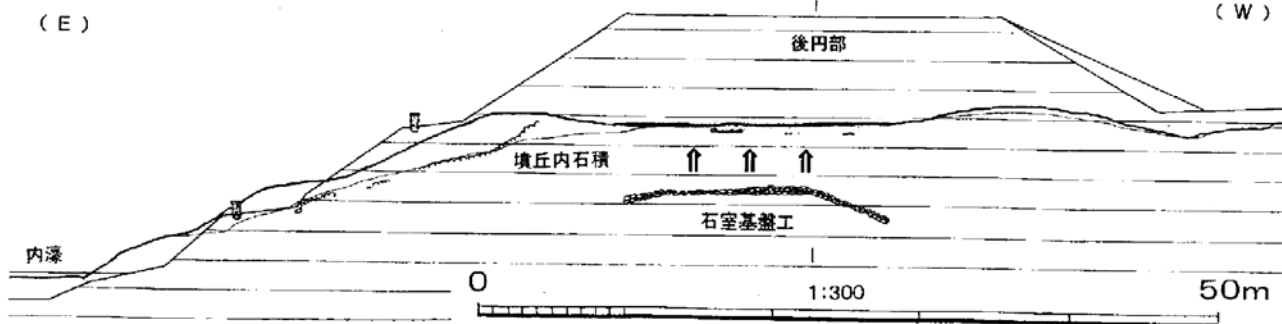
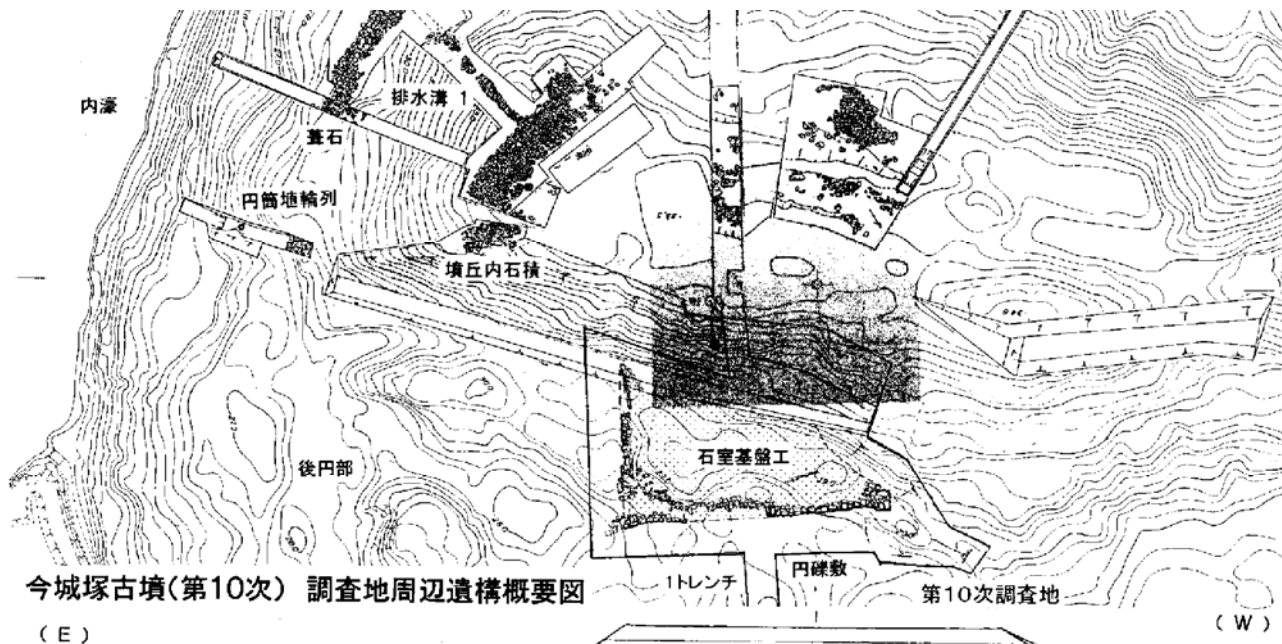
これまで横穴式石室の基礎構造は、宇治二子塚古墳（京都府）や市尾墓山古墳（奈良県）などで一部が確認されている程度で、これほど大規模かつ具体的な状況が明らかになったのは初めてのことです。

横穴式石室のような重量物を人工盛土の最上段に築き、なおかつ不等沈下や盛土崩壊を防ぐため、強固な基盤を構築し、あわせて第 8 次調査で検出した墳丘内石積や排水溝などの設備の状況を考え合わせると、墳丘の造成と石室の構築が如何に周到に計画され、入念に施工されていたかがわかります。

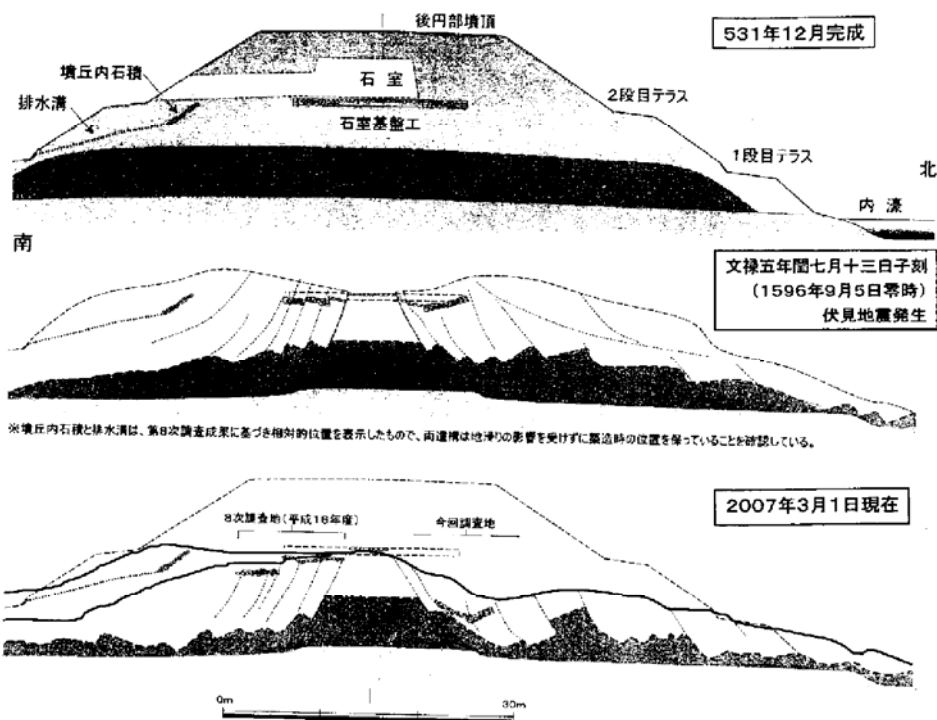
4. まとめ

以上のことから、後円部には横穴式石室が築かれていたことが確実となりました。石室基盤工の検出状況から判断すれば、石室は後円部中央付近にあり、古墳の東西軸に平行、もしくは直交して築かれていたと考えられます。石室の規模は不明確ながら、現存する墳頂部付近が石室基盤工の底面にほぼ相当する高さで推定されることから、本来の墳丘は三段築成であり、最上段となる三段目の盛土内に横穴式石室が築かれていたと考えるのが至当です。ただ、複数の調査地点から石棺片や副葬品類が出土するため、文献にもあるように、早い段階で盗掘を受け、1596 年の伏見地震以前に石室はすでに解体されていたことが明らかになりました。

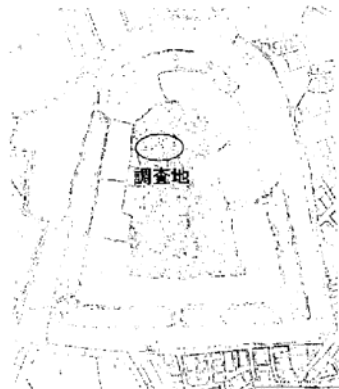
今回の調査では、今城塚古墳の主体部にかかわる遺構をはじめて確認することができました。築造当初の姿や古墳の復元を考えるうえで重要な成果を得ただけではなく、今後の大王陵級の古墳を研究するうえでも、大変貴重な資料になります。



今城塚古墳「石室基盤工」推定模式図



※墳丘内石積と排水溝は、第8次調査成果に基づき相対的位置を表示したもので、両遺構は地滑りの影響を受けずに築造時の位置を保っていることを確認している。



調査位置図

史跡 闘鶏山古墳 平成 17 年度調査（現地説明会資料 平成 18 年 2 月 4 日）

調 査 地	高槻市氷室町 6 丁目 1 番 3 地内
調 査 主 体	高槻市教育委員会
調査担当者	高橋公一・西村恵祥

1. はじめに

闘鶏山古墳は、平成 14 年の調査によって未盗掘の主体部（竪穴式石槨）2 基をそなえた古墳時代前期前半（4 世紀前半）の前方後円墳であることが明らかとなり、平成 14 年に国史跡の指定を受け、恒久的な保存が図られています。高槻市では闘鶏山古墳の保存整備に向けて、継続的に確認調査を実施しています。

これまでの調査により、全長 86.4m、墳丘は二段に築造され、斜面には葺石を施すとともに墳丘上面やテラスにも礎敷を伴うことがわかっています。ただ、埴輪を用いた形跡はありません。また墳丘からベンガラを塗布した土師器の破片が少なからず出土することから、何らかの祭祀がおこなわれていたと推定されます。

今回の調査は、前方部の形状と、古墳の南側に付設されたとみられる土壇状遺構の状況を把握するためにおこなわれています。調査は平成 17 年 10 月 17 日から開始し、調査面積は約 400 m²です。

2. H17 年度調査の成果

前方部

前端部の三方に設定した調査区（1～3 トレンチ）により、第 1 段（下段）及び第 2 段（上段）斜面と第 1 段目テラス（平坦面）を検出しました。また前方部頂に設定した調査区（6・7 トレンチ）では、前方部の盛土の状況が明らかになりました。

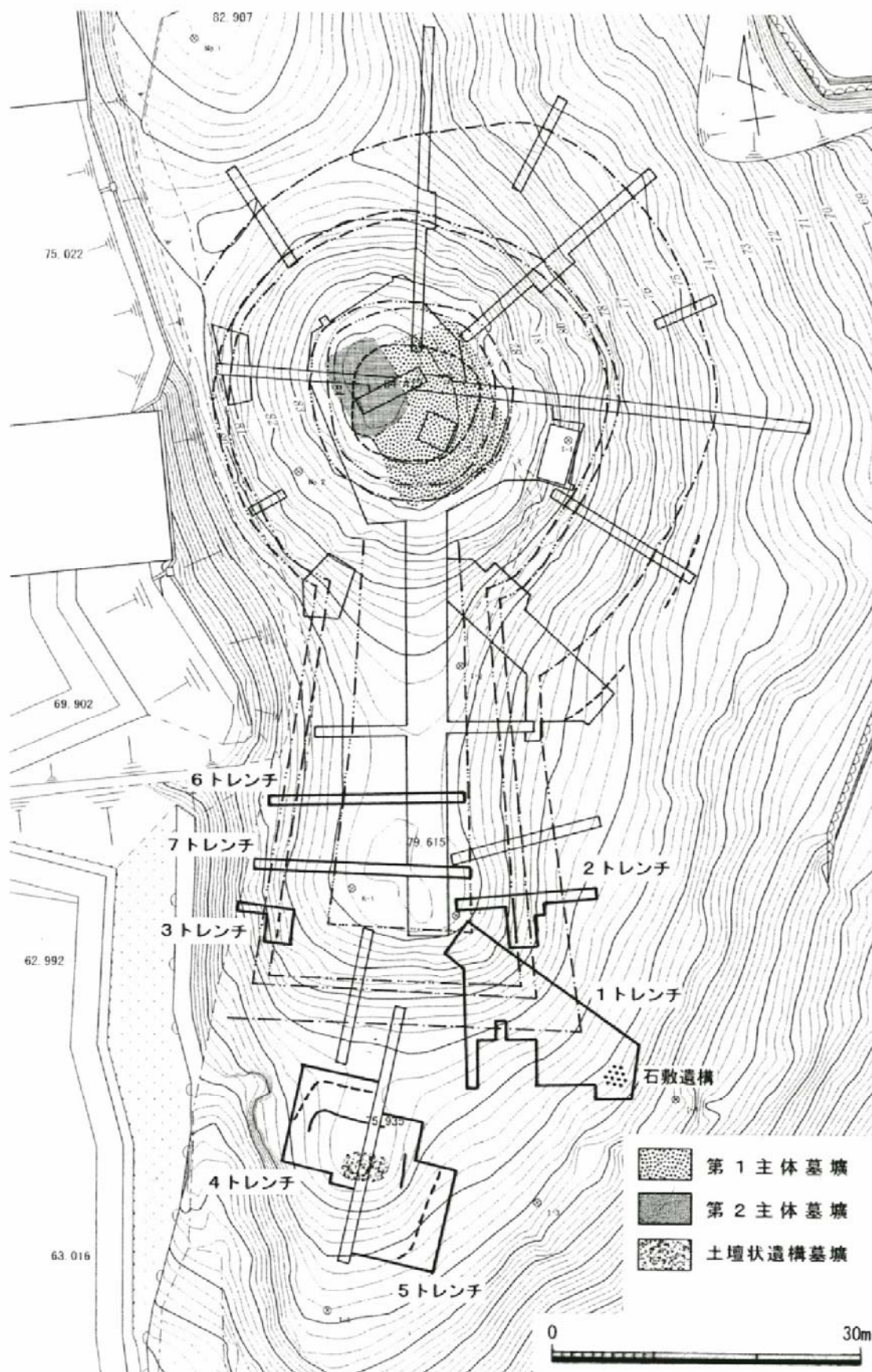
【第 1 段斜面】前断面（1 トレンチ）と東側（2 トレンチ）で葺石を検出しましたが、東隅角部はすでに流失し、前端部裾ライン及び東側裾ラインともに明確とはいえません。しかしながら、検出した傾斜変換点と前回までに確認している葺石裾部を手がかりに、失われた東隅角部を復元することができました。一方、西隅角部については、西側裾ラインが 3 トレンチのさらに外側に位置することがわかり、今回の調査では確認できませんでした。

1 トレンチの前端部で検出した、縦 1.0m、横 0.8m、高さ 0.3m の大きな石は、前断面裾ラインに位置していること、転落して現在の位置に偶然留まったものとは考えにくいことから、古墳裾部を明示する役割を担っていたと推定されます。

【第 1 段目テラス】前断面（1 トレンチ）・東側（2 トレンチ）・西側（3 トレンチ）でテラスを検出しました。いずれも上面に直径 10cm 以下の礎を敷いており、前方部テラスにおいても後円部西側と同様の礎敷を確認しました。テラスの幅は前端部で 1m、東側と西側は 1.5m と考えられます。

【第 2 段斜面】前断面（1 トレンチ）と西側（3 トレンチ）では斜面の大半が流失し、一部で葺石を検出したところですが、一方、東側（2 トレンチ）では長さ約 5m の範囲で検出でき、葺石についても、第 1 段目テラスに接する最下段には一回り大きな石（直径 25～30cm）を使用して基底石とするなど、良好に遺存していました。検出できなかった隅角部については、これらの基底石のラインをよりどころに復元することができました。その結果、第 2 段斜面の前断面の復元幅は約 25m と推定されました。

【前方部の盛土状況】前方部の盛土状況については、平成 14 年度の断ち割り調査によって、東半部の盛土を構築したのち、西半部の盛土がおこなわれたことがわかっていたましたが、今回はさらに前方部中央付近の盛土状況を把握するため調査区（6 トレンチ）を設定しました。また、以前の断ち割り調査区を西側と東側に延長し、土層の確認につとめました（7 トレンチ）。



調査区及び遺構配置図

前方部中央付近(6トレンチ)でも、墳丘中軸線を境に東半部の盛土と西半部の盛土が異なっていました。東半盛土は中軸線付近からはじまる東側に傾斜した小規模な土層が幾層もみられ、連続的な構築であったことがわかります。これに対し、西半盛土は東半盛土の西側斜面を、約40°~30度の斜面として削りなおした後に、盛土をおこなっていました。同様な削りなおしとみられる斜面が、この地点からさらに西側約3mの位置にもみられました。この斜面は約40度の角度で、西側に下傾しており、西半盛土中にも削りなおし斜面が存在することがわかります。

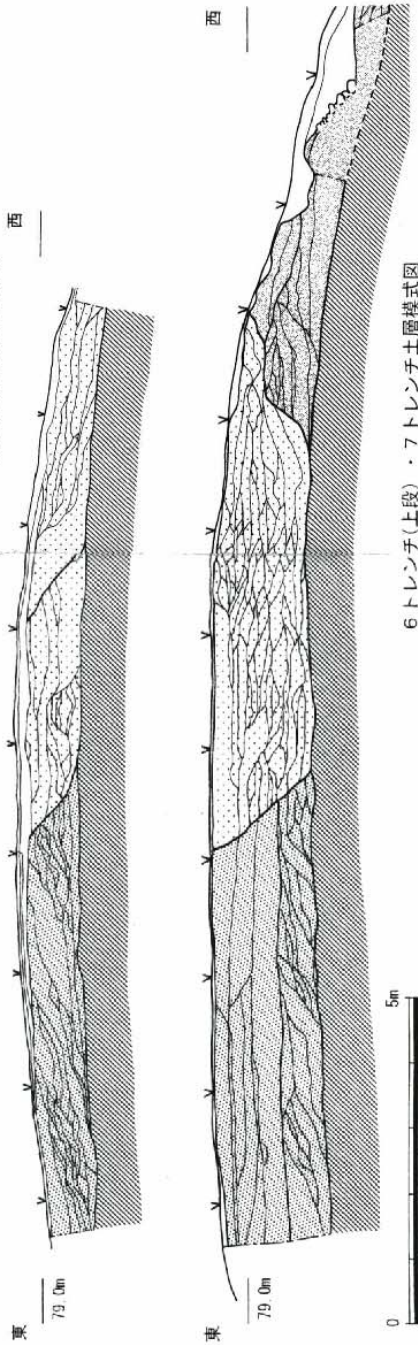
前方部南半部(7トレンチ)では、東半盛土はまず東側に傾斜する小規模な土層を積み、0.4~0.2mの厚さで水平方向に積んだのち、西側斜面を約50度の斜面で削りなおし、それより西側の盛土は厚さ0.3m程度の小規模で不規則な土層となっています。今回拡張した西端付近では、前方部南西端に位置し、東側に傾斜する斜面をもつ盛土層をあらたに検出しました。小規模な土層によって構成される西半盛土は、この西端盛土と東半盛土によってつくられた谷部を埋め立てるように積まれたものであったことがわかりました。西端盛土の機能としては、西端角部の構築にあたり、外郭ラインを先行し、かつ入念におこなう必要があったためと考えられます。

また、6トレンチと7トレンチの所見から、前方部の構築はまず東半部をおこない、次いで西半部を施工したことがほぼ確定できました。

さて中央付近と南半部で共通して検出した東半盛土の削りなおし斜面は、下部に位置する盛土の表層を削って新鮮にすることにより、上部の盛土との接合を強くすることが目的とみられ、現代工法でも一定の期間を経た盛土層の上に、さらに盛土を施工する場合におこなわれている手法です。こうしたことから、西半盛土は東半盛土の構築後、一定の空白期間をおいて施工されたと考えることができそうです。一方、中央付近では西半盛土内でも削りなおし斜面がみられ、また南半部では西半盛土に先行する西端盛土が存在するなど、盛土状況が異なっています。これは前方部の構築において、それぞれの場所に適応した手順で盛土がおこなわれていたためと推測できます。

【遺物】2トレンチからは須恵器の破片が出土しましたが、これは岡鶏山古墳とは直接関係のない遺物と考えられます。今回の調査では、岡鶏山古墳に伴う遺物は出土しませんでした。

【石敷遺構】東隅角部東南側のゆるい斜面地(1トレンチ)では、南北2m、東西1.5mの範囲で、直径15cm以下の石を敷き詰めていました。これに伴う遺物はありません。こうした石敷遺構は、後円部南東側でも検出しており、その柱石については古墳祭祀に伴うものと考えられます。



6トレンチ(上段)・7トレンチ土層模式図

土層状遺構

土層状遺構については、1次調査において臺塚状の土坑を検出しています。今回は、北西部(4トレンチ)と南東部(5トレンチ)において土層および土坑の形状と規模について調査しました。

【外装施設】4・5トレンチのほぼ全面に、粗密はありますが、直径10cm以下の隙を用いた石敷を敷きつめており、特に北面及び東面では直径15cm程度の石がほぼ直線的に並んで分布していました。特に東面では全体的に石も大きく、斜面に沿って組み上げたものとみられる部分もあり、これらは古墳の基石と同様のものと考えられます。

土層は盛土によって形成されており、石敷は盛土の上面に施されています。土層の高まりの範囲は裾部分がゆるい傾斜面となっており、そのため判断はできませんが、傾斜変換点と周囲の観察により、およそ南北17m、東西16mの方形と想定しています。

【内部施設】前回確認していた土坑の全体を検出することができました。土坑は頂上平坦面のほぼ中央に位置し、上面は東西4.6m、南北2.8mの隅丸方形です。掘形はすり鉢状になったのち平坦となり、さらに下段を深く掘り込んでいます。下段の平面形は東西3.5m、南北1.0m、長方形です。深さは0.8mですが、底部西側がやや低い構造です。遺物は出土していません。こうした2段の構造をもつ土坑は、いわゆる2段臺塚と呼ばれるタイプの埋葬施設と考えられます。木棺などの痕跡はみられませんが、下段掘形の平面形は長方形となっており、棺の埋納が想定されます。

3. H17年度調査成果のまとめ

今回の調査では、前方部の形状や規模について重要な成果がありました。西隅角部が流失していたものの、東隅角部の復元が可能となりました。また、前方部でも第1段目テラスで弾数を検出したことで、墳丘全域が石で覆われていたことが判明しました。さらに、前方部は全体的に東半部を先行して盛土し、構築されたことが確認できました。これは狭い尾根上に立地する岡鶏山古墳が持つ特性の反映と受け取れるとともに、尾根の西側が急峻であったことが作用したものと推測されます。また同じ前方部であってもその部位によって盛土状況が異なることが検証され、墳丘構築の一端が明らかになった意義も大きいといえます。

土層状遺構についてはほぼ全体像を把握することができました。そして、形態および築造の状況からこの土層は、「磨崖」としてとらえることが可能となりました。岡鶏山古墳との関係については、接した位置にあり、全面を石で覆うなどの共通点から、古墳と同時期あるいは被葬者同土に深いつながりがあることがうかがわれます。